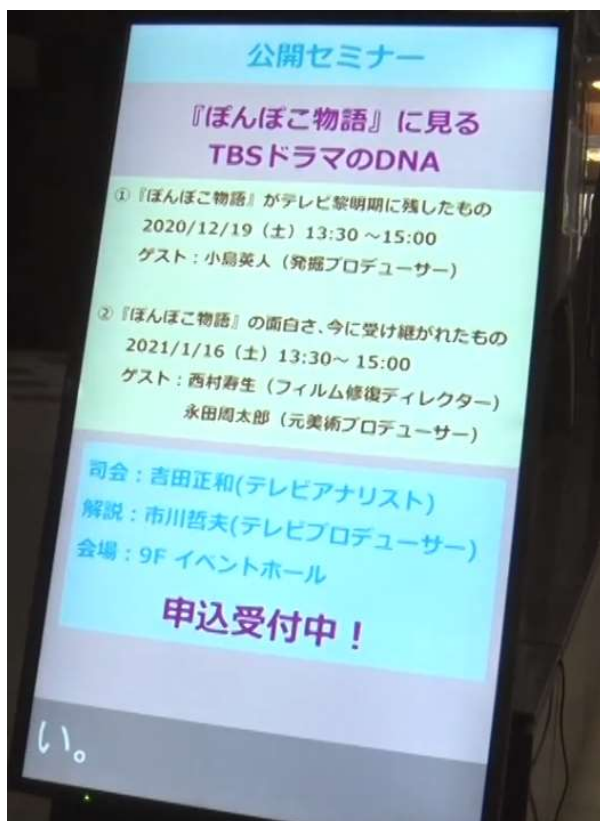


放送ライブラリー公開セミナー

2020. 12.19

「ぼんぼこ物語」に見る TBS ドラマの DNA

第一回 ～ テレビ黎明期に遺したものの～



(吉田正和) みなさん、こんにちは。テレビアナリストの吉田正和です。本日司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

【「ぼんぼこ物語」とは】

さて、「ぼんぼこ物語」はテレビ放送 67 年の歴史の中で、「日本初」の「テレビ映画」です。当時、「テレビ映画」といわれたテレビ番組です。今でいえば「テレビドラマ」です。なぜドラマといわなかったかといえば、1957 年、昭和 32 年、東京タワーをたてはじめた年です。この番組がはじまったときはドラマといえばスタジオの生放送のドラマをさしたからです。なぜ生放送かというときまだビデオもない時代であり、収録して、編集して、構成するということができませんでした。収録し編集し物語を組み立てる。それができたのは、もっぱら映画でした。アメリカのテレビではハリウッドのスタジオで「テレビ映画」をつくっていました。「名犬ラッシー」とか「スーパーマン」は映画館用ではなく、テレビのためにつくられた映画でした。日本の放送局はそれを大量に輸入して放送していました。日本の放送

局には映画として番組をつくる機材や人材やノウハウが不足していました。それでもいつかは日本の放送局もアメリカテレビ映画のように撮影し、放送しなければなりません。 「ラジオ東京テレビ」、現在の TBS テレビにはそういう認識がありました。

1957 年ついに、連続 70 本ものテレビ映画をつくることを決断しました。もちろん、誰も経験がありませんから、試行錯誤、暗中模索の中で連続ドラマづくりに乗り出しました。

苦勞して、殺人的なスケジュールのなかでできあがったのがこの「ぼんぽこ物語」です。

そんな記念碑的な番組、ドラマの源流にある番組はずの番組はずっと放送後、フィルムが行方不明でした。「幻の国産初テレビ映画」となりかけていましたが二年前、奇跡的にフィルムが大量に発見されました。状態が悪いフィルムも多かったのですが、一年かけて修復しました。そして、ここ放送ライブラリーではじめて修復されたフィルムのすべてをご覧いただけるようになりました。本日は、日本の放送の歴史を切り拓いた番組の魅力みつめ、TBS ドラマに受け継がれていった DNA といったものを考えていきたいと思います。第一話をご覧ください。7 分 53 秒です。

#### ぼんぽこ物語第 1 話「ぼん子ぼん吉誕生の巻」



(仲良しの子だぬき兄と妹、ぼん吉 (栗原眞一) ぼん子 (小鳩くるみ) はとてもお利口だったので、ご褒美に神さまの鶴のおばさん (若水ヤエ子) がふたりを人間の赤ちゃんに生まれ変わらせてくれました。しかし、物語の都合上、二人は離れ離れの場所でまったく違う境遇で赤ちゃんになることになりました。離れ離れの二人は果たしてどうなるのでしょうか・・・

(吉田) 「ぼんぽこ物語」 第一話をご覧いただきました。いかがでしたでしょうか。それではここでお二人のゲストをお呼びいたします。まず TBS で 30 年以上ドラマのプロデューサーをされた市川哲夫さんです。

(市川、入る) 市川さんは『代議士の妻たち』シリーズや日曜劇場の『課長サンの厄年』といった大ヒットドラマ、松本清張の『迷走地図』といった名作を手掛けられました。今年、3 月まで中央大学総合政策学部の特任教授としてドラマ論や放送ジャーナリズムをご講義されていました。



### 【市川哲夫、TBS ドラマの伝統を体得してきた】

(市川哲夫) みなさん、こんにちは。こういうコロナ渦でですね、外出もままならない中でこれだけの方にお越しいただきまして、わたしは、そこで解説をさせていただきますことを光栄に思っております。本日はよろしく願いいたします。私がですね、なぜ解説に呼ばれたかという事ですが、私は昔からですね、先輩たちのつくってきたドラマに大変興味を持っておりました。私がテレビ局に入りましたのも、あるドラマが私をテレビ局に誘ったということがあります。題名をあげますと木下恵介プロダクションの「人間の歌シリーズ（1970-1977 TBS）」、その中で「冬の雲」（1971）という木下恵介さんご自身が脚本をお書きになったドラマがありました。学生時代にこのドラマを見て、ぜひドラマをつくりたい、それもTBS でつくりたいと思って入社したわけです。古い人たちの仕事、先輩たちの仕事に目を向けなければいけないと常々考えてきました。30年間、つくってきましたけれど先輩たち、すぐれた先達たちとお仕事をする機会があり、まあ知らず知らずのうちにTBS ドラマの伝統を体得してきました。そして60を前に放送を離れまして雑誌「調査情報」の編集長を9年ばかり務めた後、4年前に放送文化論を講じることになったと。まあ、こういうキャリアですので、あの現場のことも知っておりますし、外側から番組のことを眺めるということもしてきましたので、そういう意味でこの企画で解説をして欲しいといわれた時にまあ私も自分なりに自負がございますので、きょうはみなさまにTBSのドラマのよき伝統いうものをお話できたらと思って参りました。よろしく願いいたします。

(吉田) 市川さんは現場の制作論とドラマの歴史という両面からの解説をお願いいたします

(吉田) 続いて TBS ヴィンテージクラシックスの発掘プロデューサーである小島英人さんをお呼びいたします。小島さんは「ぼんぼこ物語」に惚れ込み、発掘から、フィルム修復、DVD 製作をプロデュースされました。



(小島英人) みなさま、こんにちは。発掘プロデューサーというえらそうな肩書を僭称、いや名乗らせていただいております。眠っている放送由来のだいじなものを見つけて、世の中に還すという仕事をさせていただいております。

【「ぼんぼこ物語」の放送史における意味と現代における価値】

(小島) 「ぼんぼこ物語」については、この番組、作品の持つ意味ですね、放送史における意味とですね、この番組の価値をお話したいしたいと思います。価値は、先に結論をいってしまいますと、この番組は国産テレビ映画の第一号という大変古い、放送の古代史におけるたいへんに作品でありながら、とてもおもしろい番組なんです。発掘は 2 年前でしたけれど修復に一年かかりました。そしてやっと世の中に出し始めた今年 2 月、コロナが広がりはじめ、番組を広めさせていただける機会がなかったのですが、こうしてみなさまにご覧いただけますこと、関心を寄せていただきますこと、たいへんうれしいです。きょうはどうぞよろしく願いいたします。

(吉田) もともと報道のスクープ記者である小島さんには「ぼんぼこ物語」に関するファクト、取材された事実を語っていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

(吉田) さて、お話は、この後、兄と妹はそれぞれ浪人の剣豪の子ども、お姫様に生まれ変わります。お姫様は東北のどこか白妙城の初夢姫といます。兄は生まれた直後、生活に困っていた剣豪弓矢折太郎に棄てられ、悲しい子別れがあります。そして人のいい魚屋魚徳の夫婦に拾われます。兄と妹は離れ離れでしたが、7 年たったころ、妹の初夢姫が兄を探して江戸へと旅にでます。二人は再会することができるかどうか。幕末の動乱を背景に、さまざまな困難を乗り越えていく兄と妹の絆を描いています。

さて、市川さん、ドラマのプロデューサーのお立場から、この番組をあらためてご覧になったの感想をうかがいます。

### 【テレビ草創期のチャレンジ精神】

(市川) まず昭和 32 年という時点で、こういう構想力といいますか、舞台は江戸末期の話ですけれども、時代劇、ミュージカル、コメディという要素を絡めて少年少女向けにこういうドラマをつくったという、その当時の制作者たちの心意気といいますか、チャレンジ精神に感銘を受けました。

### 【古いのに革新的なドラマ】

昭和 32 年というテレビ草創期ですね。予算、制作能力に当然限界があるわけですが、セットでの撮影に加えて都内の深大寺とか六義園とか、そういう江戸時代のお話を収録するのにふさわしい場所を選んで撮影していった。予算もそんなにかけられないのですけれど、この番組にはそういう貧しさが感じられない。つまり、日本のそういう伝統的な光景の中で芝居をしている。時代劇にしたというのは、逆にこの番組を古いと感じさせない。プロデューサーとしてのアイデアが成功していると思いますね。ミュージカルということでは、小鳩くるみさんという少女のトップスターを起用して、ドラマの節目で川内康範の作詞の歌を歌わせる。これは会話だけですと脚本の紙数をとってしまうのですけれど、歌ですとこの話のテーマはこういうことであるとかですね、一発でわかるという。そういう作劇が後世の私たちにとってもヒントになる。古いドラマですが革新的なドラマであるとそういう評価をいたします。

### 【子供たちのゆめ、童謡歌手】

(吉田) 主演は小鳩くるみさんですね。小鳩くるみさんはどういう存在だったのですか

(市川) まあ、今の方たちは子役の人気者が主演したんだなというぐらいに受け止めるのかもしれないが、大いに違うのですね。この当時、「童謡歌手」という人たちがいたのですね。戦後、一気に人気を博すということがあったのですね。戦後、ご存知のように「ベビーブーム」があったのですね。私もそうなのですが、昭和 22 年から 24 年に 800 万人の子どもが生まれたのですね。驚くべき数字です。今年はまだ出生数が下がって将来が不安だという声があがっていますが、当時は今の 3 倍 4 倍の子どもたちが生まれているのですね。その中で生きていく中で、こういう子どもたちに夢を与える存在、それが童謡歌手だったのですね。童謡歌手は戦前から人もいますが、戦後、急速に広まったのです。川田三姉妹とか、安田姉妹ですね、今の由紀さおりさんが妹です、それから松島トモ子さんとか、古賀さと子さんとか近藤圭子さんとか、陸続とそういう少女歌手が生まれたのですが、その中でもこの番組の小鳩くるみさんが一番最年少で、しかも愛くるしいというので、童謡歌手の中でもとりわけ人気が高かったわけです。

その童謡歌手が社会にどれだけ影響があったかということを一例で申しますと昭和 28 年に詩人のサトウハチローさんという人がいますが、「流行歌全体の売り上げ童謡のレコードのほうが売れている」といっているのですね。それくらいのスケールで人口に膾炙していたのです。そういうなかで一番年少だけれどもかわいくて人気があったのが小鳩くるみさんだったわけです。最近の子役でいいますと芦田愛菜さんがたいへん人気がありますが、当時

(吉田) 少女スタアというのはいまでは考えられないくらいの存在だったのですね。

【オーラを放った少女スタア、小嶋くるみ】

(市川) 私も実際に同世代ですので、当時、実際の生の小嶋くるみさんを見たことがあるのです。私の兄が光文社という出版社につとめていまして、当時「なかよし」という雑誌と双壁の「少女」という雑誌がありました。そこに童謡歌手たちが毎号、毎号グラビアで登場しているのですね。ある時に兄の会社の家族パーティというものがありまして、社員の家族を呼んでパーティをやってくれたのですね。高輪の光輪閣という立派な会場でのパーティに童謡歌手のスタアたちがみんなやってきたのです。その中に小嶋くるみさんがいらっしやいました。松島トモ子さん、近藤圭子さんほか総出演の中に小嶋くるみさんがいらっしやって、その中で最年少ですが、生の小嶋くるみさんにはオーラを感じていました。それくらいの特別なスタアでした。個人的な記憶としても特別ですし、ものの本で調べても特別なスタアだったというのはおわかりいただけだと思います。

【「小嶋くるみ」は大学教授に】



雑誌「なかよし」昭和34年4月号  
小嶋くるみ (10才)

(吉田) 小嶋くるみさんはその後も大活躍を続けます。雑誌「なかよし」の表紙を6年間飾り、NHKの「おかあさんといっしょ」では「うたのおねえん」をつとめました。アニメ、「アタック No.1」では鮎原こずえの声、ディズに一の白雪姫の声などを務めています。(白雪姫は現在も) その後、1986年に芸能活動を休止し、ロンドンに留学。マザーグースの研究で学位をとって帰国後は鷺津名津江の旧姓で目白学園の英米文学教授になりました。このフィルムが発見がきっかけで2年前、30数年ぶりにテレビ出演しました。「爆報! THE フライデー」です。その時に「涙がでちゃう、女の子だもん」と最後にいつてくれている映像が2月に発売された「ぽんぽこ物語ベストセレクション」のDVDの特典映像ではいつています。爆報!の番組よりも長く素材が全部収録されています。



(吉田) さて、次はぼん吉についてです。栗原眞一さんはどういう人ですか、小島さん。

【原節子と共演した美形子役はなぜ芸能界を去ったのか】

(小島) はい、今、写真が出ていますね。松木源之助役、ぼん吉役の二役ですね。

一方、栗原眞一さんという名前はみなさんご存知ないのではと思います。小嶋くるみさんはその後も名前が残し、有名ですし、さきほどの市川先生のお話のようにオーラがある少女スタアだったのですが、栗原眞一さんは、その小嶋くるみさんに負けず劣らず凄い人だったのです。そういうことがだんだんわかってきました。この本は「テレビ大鑑」という本で1958年、ぼんぼこ物語が放送中の書籍です。中を見ますと日本ではじめてのテレビ人名録になっているのですね。その中に、俳優、アナウンサー、演出家などの名前がずらっと出ていますけれど、「男優」のところを見ますと森繁久彌さん、宇野重吉さん、横山エンタツさんといった超大物たちと並んで栗原眞一さんが掲載されているのです。最年少で、8歳で名前が載っているのです。それを読みますとですね、栗原眞一さんは、1949年4月3日生まれ。劇団あすなろに所属し7歳で日本テレビの生ドラマ「次郎物語」に出演。8歳で映画「智恵子抄」で主演の原節子（高村光太郎は山村聡）さんと共演し、セミを渡す子どもを演じました。そして、「ぼんぼこ物語」で73話を演じ切りました。そしてどうなったかという、たいへん人気がありまたのにこれでテレビをやめちゃうのですね。

どういう事情だったのか、フィルムを発掘いたしましてから何回かお会いしてお話をうかがったのですが、やはり撮影がものすごいハードだったのですね。お父様がステージパパというか、ずっと撮影についてこられていて、スタジオもロケもこられて学校を休んで朝から晩まであんまり大変だったので考えてしまったようですね。これでは学業に差し障りがあると思われたようで、残念ながら芸能界をさられてしまう。

その後、名門戸山高校から早稲田大学に進まれ、公務員として定年まで勤め上げられました。

(吉田) さて、8歳と9歳の少年少女の健気ながんばりとスタッフの粉骨砕身で全73話を完結したわけです。当時のテレビ放送の時代背景についてうかがいます。

## 【「ドラマ重視」という TBS の経営戦略】

(市川) 簡略に話しますと、みなさんご存知のようにテレビの本放送がはじまったのが昭和 28 年、1953 年ですね。NHK2 月 1 日に放送を開始し、日本テレビは同じ年の 8 月 28 日に放送を開始しました。そして、ラジオ東京ですね、TBS の前身のラジオ東京が「ラジオ東京テレビ」として放送を開始したのが 1955 年、昭和 30 年の 4 月 1 日だったのですね。TBS はテレビでは第三番目のテレビ局として放送を開始したのです。で、このことが、TBS がドラマをひとつの看板とする理由となるのです。つまり、先行している NHK と日本テレビが放送のおいしいところを先にやっているのですね。例えば力道山のプロレスとか、ジャイアンツの後楽園球場のナイターとか、キラーコンテンツは日本テレビにもっていかれていたわけです。それで TBS は一計を案じまして、民間放送として安定して放送を継続していくためにどうしたらいいのかという時に、テレビドラマを一生懸命つくるのが社業に安定するのではないかと。これは経営戦略で明確に打ち出したわけです。そのことによって他局に比べてドラマに力を注ぐテレビ局が TBS だったのですね。

## 【「ドラマの TBS」の確立】

それでなぜ「ぼんぼこ物語」をつくることになるのかにつながりますが、当時は、アメリカから輸入した「テレビ映画」とスタジオから放送する生ドラマがドラマの二本柱だったのですけれども、テレビ映画はみなアメリカのものでした。「スーパーマン」とか「名犬ラッシー」とか。TBS から放送していたのです。しかし、残念ながら国産のテレビ映画は製作できていなかったのですね。それでですね、予算の限界とか、制作の技術的な習熟度が劣っていたのですけれども、その中でプロデューサーの大垣三郎さんという方が国産のテレビ映画を企画したいとってつくったのがきょうご紹介している「ぼんぼこ物語」というわけです。その後、テレビドラマはどんどん進化していくのですがエポックとなるのが昭和 33 年ですね。「ぼんぼこ物語」から「月光仮面」に受け継がれた昭和 33 年に、TBS はスタジオドラマで二つの名作をつくるわけです。そのひとつが今も残る「私は貝になりたい」です。フランキー堺さんが主演した反戦ドラマ。



「私は貝になりたい」昭和 33 年 10 月放送  
橋本忍作、岡本愛彦演出。  
主演 フランキー堺



そして、もうひとつが森繁久彌とか、森雅之、芦田伸介といった錚々たる俳優たちが出演した「マンモスタワー」です。昭和33年11月に放送されました。この二つの作品はどちらも12月に芸術祭に参加し、「私は貝になりたい」が芸術祭の大賞をとり、「マンモスタワー」が優秀賞をとります。まあ、TBSがワンツーフイニッシュしたのです。これで「ドラマのTBS」という名声が一挙に確立しました。TBSの大きな看板がこのあたりで立つわけですね。それで昭和34年以降のテレビの発展につながっていくわけです。

【「ぼんぼこ物語」と「月光仮面」】

(吉田) さて、さきほど「月光仮面」という名前がでてきました。「月光仮面」は「ぼんぼこ物語」の後番組ですよ。小島さん、ご説明してください。

(小島) はい、「ぼんぼこ物語」は覚えやすいのですが1957年の1、1、1、1、11月11日にはじまりました。当日の新聞には「初の連続劇映画」という見出しがあります。そして最終回は、翌1958年の、これも覚えやすいのですが、2月22日でした。全73話でした。土曜日でした。月曜日から土曜日まで放送して、翌2月23日が日曜日。そして月曜日、2月24日から初回拡大スペシャルではじまった番組が「月光仮面」でございました。この日だけが30分。余談ですが、残念ながら第一話は残っていないですけれどね。まあ、そこから「月光仮面」が大人気になっていくわけです。

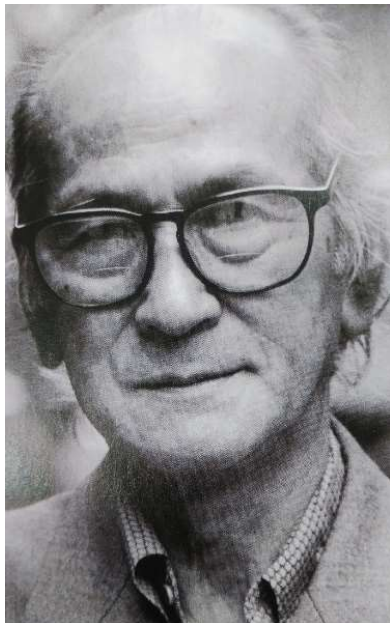


1957年11月11日  
放送開始時の新聞記事  
(スポーツニッポン)  
「初の連続劇映画」との見出し

二つの番組は当時「姉妹番組」と書かれていました。「ぼんぼこ物語」がお姉さんで「月光仮面」が弟です。けれども、弟の「月光仮面」はちょうどテレビの普及機に重なり大ブームになっていくわけです。その一方、「ぼんぼこ物語」はフィルムが無くなり、だんだんと忘れ去られていってしまいました。

この二つの番組は密接に結びついています。まず出演者がかなり移行しています。後で出てきますが大塚周夫さんですとか宇野野子さんですとか久野四郎さんなんていうバイブレイ

ヤーたちが「月光仮面」でも活躍するのですね。



でも一番結びついているのは脚本です。川内康範さんですね。同じ脚本家の脚本なのですね。川内康範さんは今年、生誕 100 年です。



川内康範(1920-2008)

鬼面菩薩（「ぼんぽこ物語」第 50 話）

「ぼんぽこ物語」は勧善懲悪のヒーローものの萌芽です。ぼん吉がピンチになるとどこからともなく「鬼面菩薩」という仮面の正義の味方があらわれます。「生涯助っ人」をモットーとした川内康範らしい助っ人ヒーローです。しかし、敵に対しても情けがあります。「憎むな、殺すな、赦しましょう」という「川内正義感」そのものです。

#### 【「ぼんぽこ物語」に込められたメッセージ~川内康範から捨ててしまった息子へ~】

川内康範というと「おふくろさん」の作詞者で、森進一さんの歌詞変更騒動があったときは実子の飯沼春樹さんという弁護士の方がテレビにもでてこられました。銀座の法律事務所の所長です。川内康範のただひとりの実子です。知られざる父子の葛藤について



毎日新聞が今年 9 月にこんな 2 ページにわたる大きな記事を掲載しています。

飯沼さんへのインタビューが軸になっています。飯沼さんはまだ小さいときに川内康範が離婚し、いわば父に棄てられたというつらい気持ちで生きてこられました。飯沼さんは「ぼんぽこ物語」の DVD をご覧になって「ああ、そうか、僕に向けている」と感じたというのですね。ぼん吉はちょうど当時の飯沼さんと同い年の設定です。実の父から

捨てられる役でもあります。棄てる側の父が子どもに「よい子になって社会の役にたつ人になりなさい」というセリフがあるのですが、それは実の我が息子へのメッセージだったのではと飯沼さんは感じられました。この記事を書かれた毎日新聞の隈元浩彦記者は「ぼんぽ

こ物語は脚本が丁寧で、川内康範の心であるとを感じる」と語っています。

1 日曜日 2020年(令和2年)9月6日(日)



「遺族の人々に行き交われぬ限り、川内康範は『月光仮面』を『遺作』と捉えず、『未完の遺作』と捉える。『月光仮面』の脚本は、川内康範の心であると語る。

7月も終わろうというのに、アリサイは気が配りだした。川内康範の遺族の人々に行き交われぬ限り、川内康範は『月光仮面』を『遺作』と捉えず、『未完の遺作』と捉える。『月光仮面』の脚本は、川内康範の心であると語る。

「『月光仮面』の脚本は、川内康範の心であると語る。」

## 月光仮面は誰で

失って初めて知る父



「月光仮面」の脚本は、川内康範の心であると語る。



## 同じ虹探した父子

——時代案いた川内康範の素顔

「月光仮面」の脚本は、川内康範の心であると語る。

「月光仮面」の脚本は、川内康範の心であると語る。

## 愛と正義 メッセージ残し



「月光仮面」の脚本は、川内康範の心であると語る。

毎日新聞 2020年9月6日記事 (隈元浩彦記者)

### 【「まんが日本昔ばなし」にも流れていた川内康範の思想】

(吉田) テレビの世界で大きな足跡を残した川内康範の初期の作品が「ぼんぼこ物語」なのです。川内康範は日本の新しいヒーローものを次々に生み出していきます。「月光仮面」の後には「レインボーマン」「ダイヤモンド・アイ」「コンドールマン」などのヒーローをうんでいます。ヒーローもの以外では川内康範さんはどういったものをやられていたのでしょうか。

(市川) 私どもはTBSなのですが毎日放送の「まんが日本昔ばなし」というアニメーションがありました。これは、川内康範さんの実子は飯沼春樹さんでありまして小島さんが紹介されましたけれども、「まんが日本昔ばなし」のプロデューサーさんは川内康範さんが三回結婚した中のひとりの女性の連れ子の方だったのです。川内彩友美さんという方です。この番組の監修は川内康範さんがなされたのです。市原悦子さんと常田富士男さんの名物ナレーションで1975年から1994年まで20年近く続けました。大人気番組でした。30%に迫る視聴率をたたき出していました。この番組は川内康範さんの思想というものが籠められていました。日本の子どもたちを健全な子どもに育てたいという考えですね。その他にもたくさん単発ドラマなどもつくられました。が、「まんが日本昔ばなし」がTBS関係では一番大きな仕事だったのではないかと思います。

### 【東京テレビ映画社というパイオニア】

(吉田) さあ、主演の子役二人、脚本家のことがよくわかりましたが、次に実際に壮絶な制作を遂行した会社のことについてうつりたいと思います。ここで残されていた「タイトルクレジット」では、「制作」は「東京テレビ映画社」となっています。この会社はどのような会社だったのでしょうか。



(小島)東京テレビ映画社は1955年3月16日に創設の日本で最初のテレビ専門プロダクションです。TBSテレビより誕生は2週間早いのです。一般的にはTBSの100%子会社として東京テレビ映画社は知られていますから奇異に感じられるかもしれませんが理由があります。そもそもTBSテレビは1951年に開局したラジオ東京のテレビ部門です。ですから

TBSテレビは1960年まで「ラジオ東京テレビ」という名前でした。TBSが日本で最初のラテ兼営局となったのが1955年4月1日。その2週間前にラジオ局として不得手な映像制作専門の会社として東京テレビ映画社が発足しました。社員は33名。その多くは「新理研映画」という記録映画、ニュース映画の専門の映画会社から集められました。東京テレビ映画社の主たる業務は「ニュース映画」の制作でした。ですからドラマについては専門外でし

た。ただ 1955 年からスタジオ生ドラマのための「インサート映像」の制作も担当していました。「日真名氏飛び出す」という TBS テレビ開局時の人気スタジオドラマがありました。その中にしばしば短いロケーションフィルムが挿入されました。それを撮影したのが東京テレビ映画社でした。TBS のドラマの最初のフィルム映像は映画ニュースの技術とニュースの技術者たちの倫理、職場文化によって撮影されたのです。このあたりは娯楽映画の職場の文化などと大きく異なると思います。ニュースの撮影の延長線上で全編を、それも毎日連続のテレビ映画に挑んだのが「ぼんぼこ物語」です。TBS のドラマの DNA にはニュース技術者たちの遺伝子があるのかも知れません。娯楽映画の世界とは異なるニュース技術者たちの生真面目な感覚とでもいいでしょうか。なお、東京テレビ映画社はその後「TBS 映画社」「TBS ビジョン」と 2 回名前を変え、2018 年 TBS スパークル社に統合されました。

### 【ドラマの時事性】

(吉田) はじめてのフィルムドラマにニュースの DNA というお話でしたが、ドラマでいうと社会派ドラマというものがあります。

(市川) 私のドラマもよく社会派ドラマといわれることがありました。ニュースとの関係とか時事性が社会派ドラマといわれることには私は抵抗がありました。映画ですと社会派の監督というのがいるのですね。社会派の巨匠ですと山本薩男という監督が「白い巨塔」とか「華麗なる一族」とかつくっています。テレビでも「白い巨塔」も「華麗なる一族」もつくっているわけですが映画のそれと何が違うかというところテレビはニュース番組とかバラエティとかそういうものと「地続き」で、時間の流れによって視聴される。映画のようにファンタジーで一貫することができない。常に日常が入り込むのがテレビ。リアルな環境、意識の中で番組を見る。コロナなら、コロナの状況の中でみる。日常の社会でおきていることが簡単に目にとびこんでくる。テレビドラマはテレビというメディアによって放送される番組。いわゆる芸術というくくりとは違う。テレビ制作者は日常の中でどうやってみてもらるか。裏でニュースやっている時にドラマをみてもらおう。映画で純粋に社会的な題材を扱うのはちょっと違う。

私は「代議士の妻たち」という番組をつくりました。昭和 63 年から平成元年です。この時は政治の世界で実際に大きなニュースがありました。リクルート事件です。裏のニュースセンター 9 ですか、そこで「きょうはリクルート事件でこれこれこういうことがありました」と報じられ、関心が高い。そういう時に裏で私は政治のドラマをつくっている。この時はフィクションとノンフィクションの違いを意識しながらも、やはりこの事件のことをドラマに入れなければいけないと思ったのです。そして、ドラマの中に盛り込むことで視聴率もあがった。報道ジャーナリズムとドラマは同一ではないが、テレビの中では現実に何が起きているかにアンテナを張り、敏感に反応しないとテレビドラマは成功しないという実感があります。

### 【コミカルな役者たちは大垣三郎一家】

(吉田) よいドラマは時代を反映しているということなのだと思いますが、「ぼんぼこ物語」もそうなのでしょうが、一方で「ぼんぼこ物語」はコミカルな味を感じます。弥次さん喜多さんのような二人がでできますね。キャラクターが舞台っぽいといいますか。



(小島) 久野四郎と里井茂さんですね。久野四郎は「月光仮面」ファンの方は「山本記者」役でお馴染みかもしれません。こういうキャラクターというのは「水戸黄門」でいえば「うっかり八兵衛」であるとかにつながっている感じを受けます。久野四郎も里井茂も「ぼんぼこ物語」に出演前から TBS と関係が深い俳優でした。久野四郎は昭和 2 年生まれ。エノケン劇団や新宿ムーランルージュで軽演劇を演じました。里井茂は昭和 4 年生まれ。最初は歌手でしたが

TBS の実写版「サザエさん」で役者デビューしました。この「サザエさん一家」の写真ではプロデューサーの大垣三郎の隣に映っています。この大垣三郎が売れっ子のやり手プロデューサーでした。日本で最初の SF ドラマ「遊星人M」もつくっています。挑戦的なヒットメーカーでした。実は、鶴のおばさん役の若水ヤエ子もムーランルージュで鳴らし、TBS では大垣三郎の「オトラさん」が最初の出演です。TBS の初代演芸課長だった大垣三郎組の役者たちがコミカルであったか演技で子役を支えたのが「ぼんぼこ物語」でした。



「藝能画報」1956年11月号 上列左から二番目が大垣三郎  
大垣の隣が里井茂

### 【「水戸黄門」の源流、ドラマ発達史の源流】

(吉田) その大垣三郎がつくられた「ぼんぼこ物語」ですが、その後のテレビに与えた影響は大きかったと思えるのですが、市川先生、いかがでしょうか。

(市川) また個人的な経験ですが、うちにテレビがやってきましたのは、昭和 34 年、1959 年の 4 月 17 日の金曜日です。日付まで覚えています。それくらい、当時の少年にはテレビは渴望といいますか、早く買って欲しいと親にねだる魔法の箱だったのですね。ちょうど同じ年の 5 月 16 日に松竹の小津安二郎映画「おはよう」が公開されています。ホームドラマですが、子どもが親にテレビを買ってくれとってストライキを起こすのですね。それくらい、この年はテレビが爆発的に普及しだした年なのです。4 月 10 日には皇太子のご成婚がありました。これがテレビ史のひとつのエポックになっています。これを契機にテレビ受像機が一気に普及するわけですね。「三丁目の夕日」という映画にも、1958 年の 12 月にテレビが家庭にやってくるという挿話があります。昭和 33 年、34 年という年はそれくらいテレビをなんとかしてもどの家庭もテレビを入れたいという頃だったのですね。「ぼんぼこ物語」は昭和 32 年から昭和 33 年というエポックの直前に生まれた日本ではじめてのテレビ映画だったのです。少しはしょって結論的にいいますと、その後ですね、放送局の制作するスタジオドラマとテレビ映画制作会社のつくるテレビ映画が車の両輪としてテレビの黄金時代を支えていくこととなります。TBS のテレビ映画で一番有名なのはやはり「水戸黄門」ですね。水戸黄門は最高視聴率が 40% を超えるという記録をつくる長寿番組となるわけですが、これは伝統的なテレビ映画、つまりフィルムで撮影して放送する時代劇ですね、それが 1969 年から 2012 年にいたるまで半世紀近く愛された国民的番組だったのですね。「ぼんぼこ物語」は、ひとつには身分を隠して世の中の問題を解決するという展開がある時代劇でもあります。さきほどのうっかり八兵衛のようなキャラクターもあり、「水戸黄門」の源流であると位置づけていいと思います。



それと車輪のもう一方で「私は貝になりたい」と「マンモスタワー」の系譜のスタジオドラマが隆盛を迎えるわけですが、ジャンルがさまざまに分化して刑事ドラマ、学園ドラ

マ、「3年B組金八先生」といった人気番組が1960年代以降花開くわけです。そのスタジオドラマの源流としても「ぼんぼこ物語」を位置づけていい部分があるのです。

兄妹という家族、兄弟のホームドラマのお話ということもありますし、ミュージカルであり、コメディであり、さまざまなドラマの要素を胚胎しているのですね。よく「処女作にすべてがあらわれるのが作家の仕事」といわれますが、「ぼんぼこ物語」にはその後のドラマのあらゆる要素が見て取れ、その後、スタジオドラマとテレビ映画の両輪で走っていったドラマの源流として総括していいと思います。

(吉田) 小島さんのほうからはいかがでしょうか。

### 【悪条件下の中で迸ったエネルギー、「半沢直樹」も然り】

(小島) 現象的な、外形的な一致ということかもしれませんが、今年はコロナ渦でドラマ受難の年でもありました。制作環境的にですね。相次ぐ制作中止もありました。放送延期、放送中止などということもありました。しかし、そういう時でしたが、振り返ればドラマは今年は充実していたのですね。「半沢直樹」の大人気ということがありましたが、あれだけのものがなぜできたのか、TBSの社内でも分析されていますけれど、ひとつ言えるのは「逆境下」だから余計に頑張っているのですね。悪条件下で頑張って、頑張って、そのエネルギーが迸ったのが「半沢直樹」のパワーという見方もできるかと思います。

で、「ぼんぼこ物語」はですね、ないないづくし。お金もなければ、ノウハウも、ドラマ作りの人もいないという中で無我夢中でつくったドラマなのですね。そういうことはぜひ皆様「ぼんぼこ物語」をご覧いただければお汲み取り戴けるかと思います。上映会ではDVD化していない39話分もご覧いただけます。

まあご覧いただけますとすさまじい挑戦ですね。あらゆるジャンルのごった煮であり、ジャンルを超えた作品ですね。後のさまざまな番組につながっていったと考えられると思います。意識的に受け継ごうということではなかったかと思いますが、なぜか受け継がれていったと感じます。

「ぼんぼこ物語」のスタッフは睡眠を削り、がんばり抜いて、スタッフの方々はわりと早く亡くなられてしまいました。「月光仮面」もそうだと聞きますね。でも、主役の大瀬康一さんはお元気ですね。「ぼんぼこ物語」もそうです。主役のお二人はお元気です。



【消えた美形子役、栗原眞一さん(71)。63年振りに公の場でのご挨拶】



(吉田) さあ、ここからおひとかた、お呼びいたしたいと思います。ご紹介させてください。本日はぽん吉役の栗原眞一さんがいらっしゃっています。栗原さん、ひとことお話をうかがえますでしょうか。栗原眞一さんです。みなさま、拍手でお迎えください。

(栗原眞一氏) みなさま、こんにちは。この寒い中、コロナの影響もある中、みなさまこうしてお集まりくださりましてありがとうございます。



栗原眞一と申します。番組の子役のイメージをこわすようなおじさんスタイルですみません。再放送もありませんでしたので、62年ぶりに当時の画面を見て、懐かしいなあと思いました。あれを見られることはないと思っていましたところ関係者たちのお力でDVDという形で見ることができるとてもうれしく思っております。

当時、8歳のときの収録でしたので子どもとしては、とにかく現場にいていわれることをやっていたということでした。だから、どんな時代背景でどんなものだったのかをよくわからないでいましたのできょう、こういう機会があり、私もあらためてなるほどそういうことだったのかと認識した次第です。ありがとうございました。

自分の子どものころのことで記憶の彼方のものも多々ありますが、とにかく学校を休んで毎日の月曜日から土曜日の放送でどんどん撮らないとストックが無くなってしまうという中で撮影していました。東京近郊の深大寺とか六義園とか暗くなると赤坂のスタジオで収録し、遅い時間まで制作が続いたという記憶があります。

きょう、会場にきてみてあんな大きなポスターを見てはれがましくもあり、実が縮まる思いもありますが、誇らしくもあります。きょうは本当にありがとうございました。



#### 【テレビの世界から引退の真相】

Q 栗原さん、テレビの世界をおやめになるというご決断はどういうものでしたか。

(栗原眞一) 父が芝居好きだったのですね。自分の夢を子どもに託すというあれで。私が幼稚園の時に児童劇団に入れられました。入れたのも父ですし、まあ「学校がたいへんだからやめろ」っていうのも父で、そこに私の意思は入っていないのですね。

「学校が大事だからやめろ」っていわれて、まあそんなものかということで、仕事に未練を残してやめたとかいうことではなかったですね。

ただ、結果的には日本テレビのスタジオの生ドラマであったり、あと原節子さんと共演させていただいたり、当時はそれだけの女優とはよくわからなかったのですが、後からすごいことだったのだなあと思うばかりで心残りということはありません。

Q 監督はどんな人

(小島) 監督は真弓典正さんという商業映画の監督。カメラは東京テレビ映画の古山三郎ですね。どんな方でしたか、栗原さん。

(栗原眞一) 年配のかたで、やさしいひとでした。なにせ当時、わたしと小嶋さんが大人に囲まれてでした。ひとりひとは記憶の彼方ですが、真弓さんという監督は休憩の時は私たちと遊んでくださったという記憶が残っています。

(吉田) そういう、よいスタッフを集めた大垣さんの手腕と言えますか

(小島) 大垣さんは草創期に実績を残した大プロデューサーですね。そう言えると思います。

(吉田) いいドラマはいいプロデューサーがいなくてはということですか。

(市川) プロデューサーとディレクターの関係は市場で食材を仕入れてくるのがプロデューサーでそれを料理するのがディレクターですね。人間でいうと右脳と左脳くらいの違いがある。ディレクターは予算とか時間を気にしない。外にどれだけ遠心力を働かせるかということがある。TBS は最初、プロデューサーとディレクターは分離していなかった。80年代にはそれが分離していった。私も80年代前半はディレクターで後半はいつの間にかプロデューサーになった。ですから、川内康範を脚本家にするとか、小嶋くるみと栗原眞一を主役に据えるというのは大垣さんの立派な仕事だったと思います。

【ロケ地は福島県の久ノ浜だった（これまで誰も知らなかった）】

(栗原眞一)

さっき何か思い出をと聞かれましたが、思い出しました。アフレコですね。スタジオではマイクが上からぶらさがっていましたが、ロケでの撮影はすべてアフターレコーディングでした。自分の絵をみてあとから入れるということでした。

ロケは近場が多かったのですが、小嶋さんは三保の松原で撮影しています。そこには私は良っていません。私だけが行ったのは、侍に囲まれ、面菩薩がでてくる場面ですが、福島県の久ノ浜（現いわき市）の海岸でした。それはよく覚えています。

もう一回行ってみたいと思っていましたが、大津波であそこも景色が変わってしまったのだろうなあと残念に思っています

(※栗原さんは久ノ浜に何日も泊まり込み撮影したといます。久ノ浜は現いわき市の海岸です。脚本家の川内康範が終戦直後、新婚生活を営み、はじめて子どもをもうけ、そして、子どもと別れた土地でした。ロケ地の選定に川内康範の意思があったのかも知れません。)